

「父の家にいる」

「さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした」（ルカによる福音書2:41）とあるように、イスラエルの人々にとって巡礼は毎年行われる大切な行事でした。神が自分たちを守ってくださっていることを改めて受け取り直して、もう一度、神と共に生きる決意を新たにすることの大切な時でした。

もっとも、現在と比べて旅をすることは簡単なことではありませんでした。何よりも情報が少ない、あるいは全然ありません。一年前は通ることのできた道が通れなくなっているかもしれません。前回は安全だったはずの場所が、すっかり様子を変えて危険になっているかもしれません。また、情報が少ないだけではありません。猛獣に襲われたり、追い剥ぎに遭ったりする可能性もあります。

それゆえ、人々は単独で行動するのではなく、同じ村や町の人たちと連れだって旅をしました。仲間の内でもっとも遅い者に歩みを合わせる「護送船団方式」が取られました。少しでも安全に旅するために皆で力を合わせたのです。

逆に言えば、旅の道連れと共にいる時だけが安全で、それ以外は危険だから、皆、集団から離れようとはしませんでした。それゆえ、「少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。イエスが道連れの中にいるものと思」（ルカによる福音書2:43-44）っていたのはある意味、当然とも言えます。自分の子どもが自ら危険な道を選ぶとは想像もしていなかったのです。

そして、両親はあちこち捜しながらエルサレムに戻り、「三日の後」（ルカによる福音書2:46）、ようやく探し当てます。この三日間の心労たるや、想像するだに恐ろしい。何と言っても「初めての子」（ルカによる福音書2:7）です。両親も初めての子育てに苦労しながら、十二歳まで育ててきました。乳幼児死亡率の高かった時代でしたから、その苦労はなおさらだったでしょう。

ところが、その両親の苦労を想像さえしていないようなイエスの姿が目に入った時、どんな思いがよぎったのでしょうか。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」（ルカによる福音書2:48）という言葉からは人間として、親として当然の心配と憤りが溢れています。

一方、「賢い受け答え」（ルカによる福音書2:47）ができるイエスのことだから、この両親の気持ちを即座に察知して神妙な態度を取るに違いないというのが私たちがまず抱く未来でしょう。しかし、その期待に反してイエスは「どうしてわたしを捜したのですか」（ルカによる福音書2:49）と答えられます。「人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです」（テサロニケの信徒への手紙一2:4）と言ったパウロのようでもあります。人の思いよりも神の思いの方がより大切だ、と。

「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だ」という言葉には、神と共に生きるのは自分にとって当然のことだから、何の心配も必要なかったのという思いがにじみます。なぜなら、「わたしが選んだ者とわたしは契約を結び／わたしの僕ダビデに誓った。あなたの子孫をとこしえに立て／あなたの王座を代々に備える」（詩編89:4-5）と、神は約束してくださっているからです。主の神殿はもとより、この世界のどこにも神の目から漏れる場所はありません。神の助けが及ばない場所もありません。全ては神の御手の内に置かれているのだから、人間は何の心配もせずに神に全てを委ねれば良いのです。

「父の家」は、この世界のどこよりも安全で安心できる場所です。「都の広場はわらべとおとめに溢れ／彼らは広場で笑いさざめく」（ゼカリヤ書8:5）とゼカリヤが預言したように、老若男女、誰一人取りこぼされることなく、安心して過ごすことのできる場所です。猫の目のようにコロコロ変わる人間の心とは異なって、神の思いは揺らぎません。人間同士では完全に保証することのできない真の安全を神は保証してくださいます。

この世界全てがこのような場所になってほしいと願います。この世界に生きる一人ひとりが、「父の家にいる」と実感できるような日が一日も早く来てほしいと願います。そのために私たちにできることから始めようではありませんか。

